

# モーゼス・ヘスの社会主義

畑 孝 一

モーゼス・ヘスは真正社会主義<sup>1)</sup>の代表者と見なされている。真正社会主義は、19世紀前半におけるドイツの社会的・経済的後進性から生じた知識階級<sup>2)</sup>の思想であり、まとまつた一つの体系を持つものではないが、青年ヘーゲル学派の思弁哲学に基きながらも、それにフランス社会主義の理論<sup>3)</sup>を結びつけることによつて、鋭い社会批判を行つたところにその意義がある<sup>4)</sup>と思う。この真正社会主義者のうちでヘスが最も鋭い社会批判を行つている。しかしヘスを含めた真正社会主義は、資本主義的発展の進んだ国の理論をそのまま未発展の社会に適用して空想的・観念的解決を求めたため、1848年の革命と『共産党宣言』におけるマルクスの批判<sup>5)</sup>により全く崩壊した<sup>6)</sup>のであつた<sup>7)</sup>。

ここではこのヘスの社会主義を簡単に紹介したいと思う。彼は独自の行動の哲学を用いて、宗教と政治による支配の否定と、資本主義社会における害悪の源泉としての私有財産の廃止とを主張し、それによつて労働と享受が一致して自由と平等が支配し、人間の幸福が保証される理想社会を作り上げようとした。更に、フォイエルバッハの哲学を社会分析に適用して、資本主義社会における貨幣による人間の自己疎外を論証することによつて彼の社会主義は頂点に達した。しかし、其の後ヘスはマルクスに影響されてその思想に近付き、彼独自の思想を失うと共に、更にプロレタリア革命に対する見解の相違からマルクスの思想とも離れるようになる。

このような彼の社会主義思想は1937~50年の間の著作に現われている。そしてそれは43年の『二十一ボーゲン』<sup>8)</sup>誌の三つの論文において確立し、44年に書かれた論文「貨幣体について」<sup>9)</sup>において更に発展したが、47年に

はすでに強くマルクスの影響を受けた論文が現われるのである。しかもこの短い期間においても、彼の思想は絶えず混乱して論理的一貫性を欠き、理論体系としてはまとまっていなかった。そこで、ヘスの社会主義思想を体系的にまとめることがこの論文における中心課題となつた。私はここで、彼の思想的発展を概観しながらその課題を果そうと思う。

ヘスは1812年にユダヤ人として生まれ、幼時に強いユダヤ教的教育を受けた。<sup>10)</sup> そのため彼はユダヤ人の解放を確信するようになったが、解放をユダヤ人だけに限らず抑圧されたあらゆる人民に拡げ、全人類の解放として成し遂げようとした。ここに彼の思想の、ユダヤ教的思想と社会主義思想との結びつきが現われている。そして彼はその基礎づけをスピノザによつて行おうとしたが、それは彼の最初の著書『人類の聖史』<sup>11)</sup> に示されている。

彼はそこで、スピノザに基いて神を自然と精神との統一とし、人類の歴史を神が人間に現われる過程として、すなわち無意識的な人間が自己意識を持った人間に発展する過程として把握している。従つて彼によれば、人類史の第一段階では人間は自然としてのみ生き、第二段階では精神が現われるが、人間は自然と精神との分裂によつて対立して生き、第三段階で初めて人間は自然と精神との統一として調和して生きるのである。<sup>12)</sup> (この歴史把握にはヘーゲルとフィヒテの影響がある。)<sup>13)</sup><sup>14)</sup>

そしてこの哲学的立場から、彼は現実の社会を批判する。彼によれば、自然と精神が分裂している現在の社会では、人間が自己のためにのみ生活する利己主義が支配し、それは富と貧困との対立において頂点に達した。<sup>15)</sup> そこから必然的に革命が生じ、<sup>16)</sup> 国家が「一般的相続人」(Universalerbe)になることによつて不平等の原因たる私有財産を廃止する。こうして、財産の共有に基く平等が支配し、自然と精神とが一致する調和の社会が作られるのである。<sup>17)</sup>

その後ヘスは現実の問題を扱つた『ヨーロッパ三頭政治』<sup>18)</sup> を書き、彼の思想を次のように発展させた。<sup>19)</sup> すなわち、彼はここで、自然と精神との統一を神ではなく自由な人間として把握し、<sup>20)</sup> 人類の歴史を自由な精神が人間

に現われる過程とした。<sup>21)</sup>そして彼は、人類の完成が現実の歴史では如何に成就するかを独、仏、英三国によつて具体的に考察する。彼によれば、両国の国民性の相違のためにドイツでは宗教改革によつて精神的自由が、フランスでは革命によつて政治的自由が達成された。<sup>22)</sup>しかしそれらは何れも一面的であつて不完全であり、それらの結合された社会的自由が達成されなければならない。それは富と貧困との対立が貨幣貴族性 (Geldaristokratie) と一般的窮乏 (Pauperismus) との対立として極点にまで進んでいる英国において達成されるだろう。<sup>23)</sup>

このようにして達成される社会主義社会は、彼によれば、本来あらゆる宗派宗教を越えた絶対的宗教に基くものであるが、<sup>24)</sup>過渡期には全体の利益を代表する国家がその絶対権力によつて対立する利益を仲裁し、<sup>25)</sup>そうして私有財産を廃止することによつて作り上げるものである。しかし彼においては、この国家の正常な運営は、<sup>26)</sup>理性=自由な精神の代表者である知識人によつて保証されるのであるから、革命の担い手はプロレタリア階級ではなく知識人であつた。

又ヘスは教会と国家の関係について、教会は人間の精神だけを考慮し未来を予言するだけであるが、<sup>27)</sup>国家は人間の全体を考慮し未来の予言を現実化するのとして

以上のようにヘスの初期の思想においては、人間は自然と精神との統一として把握されたが主体は精神であつた。だから、人類の発展は神又は自由な精神が現実の人間に現われる過程と考えられ、歴史の発展が自己意識の発展に解消されてしまつた。そのために又、革命及び社会主義社会の建設において、知識人がその担い手と見なされることになつた。

しかし、彼は人間を精神に解消するだけでなく自然としての人間をも認めているから (但し彼においては、自然としての人間は精神によつて規定され、一般に現実を意識の反映と見なされていた)、自然としての人間に基いて行う社会批判には鋭い見解が示されていた。すなわち、資本主義社会における利己主義及び不自由と不平等は私有財産によつて生ずるから、そ

の廢止が革命の目的として規定される。かように彼は社会問題を重視してその解決を基本目標とするが、しかし彼においては社会改革は全人類の立場から行われ、しかも国家によつて国家の枠の中で、すなわち国家が「一般的相斡人」又は、自由と平等を保証し対立する利益を仲裁する機関になることによつて可能であると考えられていた。

ところが1842年の『ライン新聞』への寄稿を中心とする諸論文においては、思想の中心が国家=政治の問題から社会問題へ移行する、ヘスの思想の過渡期であることが示されている。<sup>28)</sup>

彼はここで哲学的にははつきりと批判哲学の立場に立ち、ヘーゲル的な絶対精神の現われとしての歴史を否定し、歴史は自己意識の絶えざる批判により発展すると考えた。<sup>29)</sup> こうして彼は現存するものの批判の意義を確認し、社会改革の実践のためにはその基礎となる理論を重視しなければなら<sup>30)</sup>ないとした。そして彼は、貧富の対立による不自由と不平等の基礎は絶対主義国家<sup>31)</sup>ではなく資本主義社会そのものにあると見なし、国家が社会問題を解決し得ないのは社会そのものの欠陥であつて国家の罪ではないとし<sup>32)</sup>た。又ここでは、社会主義社会は人間が自己の本質たる類としての生活を送る状態であり、利己主義の社会はそれと反対に、人間が類から分離した<sup>33)</sup>個人的生活を送る状態であるとした。(ここにフォイエルバッハの影響が<sup>34)</sup>現われている。)

又教会と国家の関係は宗教と倫理との関係として次のように論じられる。すなわち宗教の本質は善なるものを得んとする願望=永遠の努力であり、他方倫理の本質はその実現である。従つて両者はその活動領域を限定して、宗教は人間の私的生活を、倫理は公的生活を夫々自己の活動領域とすれば、相方共未だ価値を持つている。そして国家はこの倫理的な実践=<sup>35)</sup>政治を行うのである。このようにこの時期には、ヘスは宗教も国家も未だ肯定していた。

その後ヘス独自の社会主義は、フォイエルバッハの哲学を社会分析に適用することによつて確立した。それは前述の1843年の三論文、すなわち

『行動の哲学』 „Philosophie der Tat“ 『社会主義と共産主義』 „Sozialismus und Kommunismus“ 及び 『唯一全体の自由』 „Die Eine und ganze Freiheit“ において示されている。そこでは、人類の解放は国家の枠においてではなく社会的地盤において達成され得るのであり、国家＝政治の問題ではなく社会的問題が最も重要な問題であるということが、はつきりと示されている。<sup>36)</sup>

ヘスは先ず哲学的基礎として独自の行動の哲学を完成する。それは思惟における自己意識の弁証法であり、それによれば、無自覚的自我が反省によつて主体と客体に分裂し、更にその反省の止揚によつて自己意識を持った自我＝理念（自己同一〔Selbstgleichheit〕＝同一性〔Identität〕）が形成されると見なされる。<sup>37)</sup>従つて、存在するものは運動であつて静止ではなく、その運動が反省によつて中断されて凝固するときのみ主体と客体との分裂が固定し、静止が現われるのである。<sup>38)</sup>かようにここでは、生活は自我の現実的現われとされ、自己意識を持った現実的生活における精神と生活との一致が認められている。

ここから歴史は、無自覚的自我としての人間が反省の段階を通つて自己意識を持った自我としての人間に至る過程と解され、<sup>39)</sup>又現実の認識は、この自己意識の弁証法における論理すなわち現実的自我が成立する法則を、<sup>40)</sup>現実に適用することによつて可能となるのである。すなわち彼によれば、本来多様な自我＝類は個によつて実現され、人類は個人によつて現実化されるのに対して、反省においては自我＝類は同一とされ、類は抽象的普遍として多様な個に対し、類と個は一致せず分離したままである。<sup>41)</sup>

ヘスはこのような哲学に基いて現実の社会問題の解決に立ち向うのであるが、先ず、彼にとつて第一の問題である自由の実現は次のように論じられる。すなわち彼によれば、自由は自己規定＝自己制限であつて外的制限＝<sup>42)</sup>支配を認めないことである。ところが現在の反省の時代においては、宗教と政治が結びついて人間を精神的及び政治的に支配している。<sup>43)</sup>つまり抽象的普遍としての神及び君主が、抽象的個別としての精神及び諸個人を支配

している。<sup>44)</sup>それはキリスト教と絶対主義国家において頂点に達した。<sup>45)</sup>そこでそれに対してドイツとフランスが夫々精神的又は政治的な人間の解放を試み、無神論と革命を始めた。<sup>46)</sup>しかしそれらは何れも一面的であつたために失敗し、形を変えた支配が復活した。すなわち、抽象的普遍としてではなく抽象的個別としての支配が理性宗教と共和国として現われた。<sup>48)</sup>こうして一者の支配は多者の支配に、<sup>49)</sup>少数による多数の支配に変つたのである。<sup>50)</sup>しかもここでは人間の自己意識が生じているのであるから矛盾は更に激化している。<sup>51)</sup>だからヘスは、人間の自由は精神的及び政治的に同時に、しかも直ちに達成されなければならないと考えた。<sup>52)</sup>従つて彼によれば、宗教と政治が一挙に廃止されることによつてのみ唯一全体の自由が獲得されるのである。<sup>53)</sup>

更にヘスによれば、この抽象的個による支配は、私有財産制度の下では不平等として現われる。すなわち、そこでは労働と享受が分裂しているので、人間は自己の生命を維持するために自己の作り出したものを物質的財産として保持しなければならない。<sup>54)</sup>従つて孤立した諸個人の利己主義が発展して相互の競争が激化し、貧富の差が生じて不平等が現われるようになる。そしてこの社会的な不平等は国家による政治的支配と結びつき、少数の富者による多数の貧困者の支配が生ずる。<sup>55)</sup>だから、不平等の基礎である私有財産を廃止することによつてのみ人格的自由と社会的平等を実現し、あらゆる生活の絶対的統一という近代世界の基本原理を現実化することが出来るのである。<sup>56)</sup>

このようにして実現される社会をヘスは共産主義社会と名付け、そこでは財産の共有に基いて自由と平等が支配し、人間が自分の好みに応じた労働をすることによつて労働と享受は一致し、労働は自然に組織されて人間の幸福が保証されるとする。<sup>57)</sup>(ヘスは労働と享受の関係をスピノザの倫理学によつて基礎づけ、自由な活動は享受と一致するが強制された労働は享受と分裂するとしている。<sup>58)</sup>)

かようにヘスは宗教と政治を否定し、私有財産の廃止による人類の解放

を國家の枠においてではなく社会そのものにおいて行おうとした。しかし彼においては、共產主義は倫理学の實踐的實現であり、従つてそれはプロレタリア革命によつてではなく原理上の闘争によつて現實化され得ると考<sup>59)</sup>えられていた。

こうして彼においては、資本主義社会は利己主義に基く孤立した諸個人の相互の闘争の社会として特徴づけられ、従つてブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争も利己主義による闘争に解消され、利己主義の止揚<sup>60)</sup>は階級的立場からではなく全人類の立場から行われることになつた。<sup>60)</sup>又彼はそれが原理上の闘争によつて行われるとしたため、社会的問題の解決が観念的に行われることになつた。<sup>61)</sup>ここに、ヘスの社会主義の空想的・観念論的性格がある。そしてそれは、彼が社会的に、ブルジョアジーとプロレタリアートの双方から脅かされる知識人の立場に立つていたことを示して<sup>62)</sup>おり、又彼が基本的に、人間を精神に解消する観念論的哲学に基いていたことに由来している。<sup>63)</sup>(マルクスはこれらの論文を高く評価していた。)

ヘスの社会主義はこのような欠陥を持つにも拘らず、「生活」として把握した人間に基いて行つた社会批判は非常に優れたものであつた。それは「貨幣<sup>64)</sup>について」において行われている。彼はここでフォイエルバッハの疎外の理論を貨幣の本質の分析に適用し、資本主義社会における人間の自己疎外の状態を明らかにしたのである。<sup>65)</sup>

彼は先ず、人間の本質が類であり、従つて人間は相互に生産的生命活動を交換する=交通(Verkehr)するところ、すなわち社会においてのみ生きることが出来るということを明らかにする。<sup>66)</sup>ところが彼によれば、人間は今迄類と切り離されて相互の闘争によつて發展して来たのであり、現在は<sup>67)</sup>その頂点に達している。そして孤立した人間は自己の生存のために類=社会を手段として利用するようになり、類が目的であつて個が手段である自然的<sup>68)</sup>生活の顛倒が生じた。このような利己主義の社会をヘスは小商人世界<sup>69)</sup>(Krämerwelt)と名付ける。

そして彼によれば、この小商人世界においては人間は直接協働して生命

活動を交換することが出来ないから、生きるためにはその活動の結果を交換しなければならず、従つて自己の本質を外在化しなければならない。この外在化した人間の本質たる財産はここでは貨幣として現われる。<sup>70)</sup> 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85)

この人間の自己疎外=非人間化の状態をへすは更に次のように論ずる。小商人世界では、人間は貨幣によつて価値を測られるから売却され得る限り価値を持つが、それは自由競争によつてますます引き下げられ、又人間は飢餓に脅かされて増々激しく勞働しなければならなくなる。そしてここでは人間が意識的に自己を売らねばならないからその社会は非人間的である。更に中世には共同体が未だ価値を持つていたのに小商人世界ではそれが全く失われているから、小商人世界は中世以下の社会である。

こうして小商人世界では一般的搾取と普通の隷屬が完成し、人間は動物界の先端にいる完成した利己主義者として自分達自身を苦しめる吸血動物となり、死の平等と猛獣の自由が支配する。

この勞働と享受とが分裂した社会では貨幣が唯一の財産と見なされるがそれは勞働と享受が一致する自由な活動そのものとしての眞実の財産ではない。何故なら、貨幣財産は人間を数によつて表わすのに対して、眞実の財産たる自由な活動には質的相違があるから。しかも人間はこの貨幣財産と結びつかねばならないから、この矛盾が人間を破滅に陥れるのである。

この、あらゆるものが貨幣化され、人間が孤立している小商人世界は假象の世界=虚偽の世界であり、そこでは現象は本質に背反して、自由と平等の假象の下に隷屬と不平等が支配している。

このような社会は、精神を神聖視して肉体を罪惡視するキリスト教の教義により、人間の自己売却が肉体の売却として容易になることによつて、その実現が促進された。又この社会はキリスト教的實踐者が、キリスト教

の天国を現実化しようとして実現されたのであつた。<sup>86)</sup> こうしてここでは、人間は精神的人間として抽象的な人格を保証され、孤立した個人として生きることになる。又ここでは自己の肉体を売る自由とそのための平等の権利によつて、人間はかえつて物質的にのみ生きることになり人間の本質が破壊された。<sup>87)</sup>

しかしヘスによれば、人間が真の人間として直接交通して生きようになるなら、間接的交通の手段としての貨幣は必然的に消滅するのである。<sup>88)</sup> そして人間の間接的交通＝人間の闘争は人間的諸力＝生産力を発展させ得る間だけ有効であつたが、現在では過剰に発展した生産力がかえつて人間を破滅の状態に突き落している。すなわち、一方では勞働する大衆をますます貧困にするのに対して、他方では過剰な享受に耽ける極く少数の人がいる。<sup>89)</sup> しかも人間は、その弊害を除去した共産主義の社会＝組織された人類の国を原理的に完成している<sup>90)</sup>のであるから、愛によつて相互に結びつくならその社会に移ることが出来る。<sup>91)</sup>

以上のようにヘスは資本主義社会を小商人世界＝利己主義の社会として批判し、<sup>92)</sup>未来社会としての共産主義社会への移行を概観する。そして彼は、勞働と享受が分裂している限りブルジョアジーもプロレタリアートも同様に貧困であり、破滅の状態にあると見なしているから、<sup>93)</sup>社会改革は彼にとつてやはり階級の立場に立たず全人類の立場から行われることになる。<sup>94)</sup> 彼は新しい原理が見出されているなら、人間が意識的にそれに従うことによつて新しい社会を作ることが出来るとするから、社会改革は現実の社会の場においてではなく人間の意識において行われることになる。<sup>95)</sup> このような点にも、ヘスの社会批判の空想的・観念論的性格が現われている。

しかし彼は物質的に把握した人間に基く限り、貨幣による人間の本質の外在化（但し彼は商品としての生産物による外在化が貨幣による外在化に転化することを見ていない）<sup>96)</sup>及び貨幣による人間の本質の自己疎外の状態を正しく把握している。（コルニュはこの点がマルクスに大きな影響を与えたとして<sup>97)</sup>いる。）

このようにヘスの社会主義は唯物論と観念論の混淆であり、唯物論に基づく限り正しい見解を示すが観念論に基づくときには誤つた見解を示し、基本的には観念論に基づくことになるのである。

その後ヘスはマルクスの影響の下にその思想に近づき、経済学的には外見上全くそれを受け入れているようになるが、革命の手段についてはブルジョアジーの説得を重視して観念論的性格を残している。そして1848年の革命の失敗の後には、ヘスはマルクスと意見を異にしてすぐ次の革命が生じねばならないとし、それを神祕的な歴史哲学によつて論証しようとした。<sup>100)</sup>こうして彼はマルクス主義から離れて初期の思想に戻るのである。つまり彼は、革命を生ぜしめようとする彼の願望にマルクス主義が一致する限りでそれを受け入れたのであり、その一致が破れるとそれを棄て、彼の意志的活動を是認する初期の思想を受け入れたのである。<sup>101)</sup>こうして彼は、それ以後シオニズムの予言の立場に立ち、又自然科学の研究に向うのである。<sup>102)</sup>  
<sup>103)</sup>  
<sup>104)</sup>ある。

- 註 1) S. Hook, "From HegeI to Marx, Studies in the intellectual Development of Karl Marx," London, 1936, S. 188. 又, Vgl. I. Goitein, „Probleme der Gesellschaft und des Staates bei Moses He3," Leipzig, 1936, S. 54, Anm. 43.
- 2) Hook, a.a.O., S. 188. 又 G. Lukács, „Moses Heß und die Probleme der idealistischen Dialektik," Leipzig, 1926. Sondevabdruck aus dem von Carl Grünberg herausgegebenen Archiv für die „Geschichite des Sozialismus und der Arbeiterbewegung." XII. S. 3.
- 3) Hook, a.a.O., S. 188,
- 4) Vgl. Lukács, a.a.O., S. 3.
- 5) Lukács, a.a.O., S. 3.
- 6) K. Marx, „Manifest der Kommunistischen Partei," Bücherei des Marxismus-Leninismus, Band I, Berlin, 1953, S. 39-41. 邦訳、国民文庫、61-63頁。
- 7) Vgl. F. Mehring, „Karl Marx, Geschichite seines Lebens," Leipzig, 1923. 邦訳『カール・マルクス (その生涯の歴史)』大月書店、1953年第一巻、152-153頁。
- 8) „Einundzwanzig Bogen aus der Schweiz," herausg. von G. Herwegh, Zürich und Winterthur, 1843.

- 9) „Über das Geldwesen.“ in „Rheinischer Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform,” Bd. I, 1845.
- 10) 選ばれた民としてのユダヤ人の神聖な任務の信仰、すなわち、ユダヤ人は何時か最も貧窮な状態から抜け出して最高の繁栄に達するという信仰である。
- 11) „Die Heilige Geschichte der Menschheit. Von einem Jünger Spinozas.“ Stuttgart, Hallberger, 1837.
- 12) ebda., S. 327.
- 13) Vgl. Goitein, a.a.O., S. 14. 又 A. Cornu, “Moses Heß et la gauche hegelienne,” Paris, 1934, S. 9.
- 14) Vgl. Lukács, a.a.O., S. 7.
- 15) „Heilige Geschichte,” S. 259.
- 16) ebda., S. 303-304.
- 17) ebda., S. 248-249.
- 18) Vgl. Cornu, a.a.O., S. 54-64,
- 19) „Die europäische Triarchie,” Leipzig, 1841.
- 20) ebda., S. 10.
- 21) ebda., S. 15.
- 22) ebda., S. 142.
- 23) ebda., S. 173.
- 24) ebda., S. 117.
- 25) ebda., S. 63, usw.
- 26) Vgl. ebda., S. 116.
- 27) ebda., S. 76-77.
- 28) Vgl. Goitein, a.a.O., S. 39.
- 29) Vgl. „Gegenwärtige Krise der deutsche Philosophie,” in „Athenäum,” 1841. Th. Zlocisti, “Moses Heß, Sozialistische Aufsätze,” Berlin, 1921, S. 8-11.
- 30) Vgl. „Rheinische Zeitung.“ Beiblatt Nr. 163 vom 12. Juni 1842. „Die Tagespress in Deutschland und Frankreich.“ Zlocisti, a.a.O., S. 19-24.
- 31) Vgl. „Rhein, Zeitung.“ Beiblatt Nr. 254 v. 11. September 1842. „Die Politischen Parteien in Deutschland.“ Zlocisti, a.a.O., S. 30-36.
- 32) Vgl. „Rhein. Zeitung.“ Beiblatt Nr. 109 v. 19. April 1842. „Das Rätsel des 19. Jahrhundert.“ Zlocisti, a.a.O., S. 12-13.

- 33) Vgl. „Rhein. Zeitung.“ Beiblatt Nr. 137 v. 17. Mai 1842. „Deutschland und Frankreich in Bezug auf die Zentralisationsfrage.“ Zlocisti, a.a.O., S. 13-19.
- 34) Vgl. Goitein, a.a.O., S. 52.
- 35) „Rhein. Zeitung.“ Beiblatt Nr. 216 v. 4. August 1842. „Religion und Sittlichkeit.“ Zlocisti, a.a.O., S. 27-30.
- 36) Vgl. Cornu, „Marx und Engels,“ S. 374.
- 37) „Philosophie der Tat.“ Zlocisti, a.a.O., S. 37.
- 38) ebda., S. 37-38.
- 39) ebda., S. 40 und S. 43.
- 40) ebda., S. 38 und S. 39.
- 41) ebda., S. 39-41.
- 42) ebda., S. 55.
- 43) ebda., S. 41.
- 44) ebda., S. 41-45.
- 45) ebda., S. 47.
- 46) „Sozialismus und Kommunismus.“ ebda., S. 63.
- 47) „Philosophie der Tat.“ ebda., S. 45.
- 48) „Sozialismus und Kommunismus.“ ebda., S. 63.
- 49) ebda., S. 75-76.
- 50) „Philosophie der Tat.“ ebda., S. 47-48.
- 51) ebda., S. 49.
- 52) ebda., S. 43-44.
- 53) Vgl. „Die Ein und ganze Freiheit.“ „Einundzwanzig Bogen“ S. 92-95.
- 54) „Philosophie der Tat.“ Zlocisti, a.a.O., S. 51 und S. 58.
- 55) „Sozialismus und Kommunismus.“ ebda., S. 73-75.
- 56) ebda., S. 66 und S. 67-68.
- 57) ebda., S. 74.
- 58) „Philosophie der Tat.“ ebda., S. 51.
- 59) „Sozialismus und Kommunismus.“ ebda., S. 70-74.
- 60) Vgl. Lukács, a.a.O., S. 21.
- 61) Vgl. ebda., S. 20.
- 62) Vgl. Cornu, „Marx und Engels,“ S. 377-378.
- 63) „Zur Kritik der Nationalökonomie. Ökonomisch-philosophische Manuskript.“ „Kleine ökonomische Schriften,“ „Bücherei des Marxis-

mus-Leninismus "Band 42, Berlin, 1955, S. 133. 邦訳、マルクス＝  
エンゲルス選集、補巻四、大月書店、1955年、132頁。

- 64) ヘスはこの論文で、人間の本質としての共同体 *Gemeinwesen* は利己主義の社会では *Geldwesen* として現われるとして、*Gemeinwesen* と *Geldwesen* と対比して論じている。そこで私は共同体との対比を強調する意味で、*Geldwesen* を一応「貨幣体」と訳しておいた。
- 65) Vgl. Cornu, „Marx und Engels,“ S. 532.
- 66) „Über das Geldwesen.“ *Zlocisti*, a.a.O., S. 159-160.
- 67) ebda., S. 163-164.
- 68) ebda., S. 164-166.
- 69) ebda., S. 166.
- 70) ebda., S. 162-163 und S. 166.
- 71) ebda., S. 166 und S. 170.
- 72) ebda., S. 166.
- 73) ebda., S. 166-167.
- 74) ebda., S. 165-166.
- 75) ebda., S. 167.
- 76) ebda., S. 168.
- 77) ebda., S. 168-169 und S. 177.
- 78) ebda., S. 178.
- 79) ebda., S. 181-182.
- 80) ebda., S. 178-179.
- 81) ebda., S. 179.
- 82) ebda., S. 178-179.
- 83) ebda., S. 173.
- 84) ebda., S. 180-181.
- 85) ebda., S. 169.
- 86) ebda., S. 172-173.
- 87) ebda., S. 175-176.
- 88) ebda., S. 183-185.
- 89) ebda., S. 185-186.
- 90) ebda., S. 161.
- 91) ebda., S. 186.
- 92) Vgl. Cornu, „Marx und Engels,“ S. 436 und S. 522.
- 93) Vgl. K. Mielke, „Deutscher Frühsozialismus. Gesellschaft und Geschichte in den Schriften von Weitling und Heß.“ Stuttgart,

- 1931, S. 163.
- 94) Vgl. Th. Zlocisti, „Moses Heß, der Vorkämpfer des Sozialismus und Zionismus,“ zte neubearbeitet Aufl. Berlin, 1921, S. 201.
- 95) Vgl. Cornu, „Moses Heß.“ S. 230-231.
- 96) コルニユは、この商品による外在化をヘスが認めているとする。Vgl. Cornu, „Marx und Engels,“ S. 522.
- 97) Vgl. ebda., S. 522.
- 98) Vgl. „System des contradictions économiques ou philosophie de la misère,“ 1847. Goitein, a.a.O., S. 137-143. 又 Vgl. “Die Folge der Revolution des Proletariats,” in „Deutsche Brüsseler Zeitung,“ 1847. Zlocisti, a.a.O., S. 207-231.
- 99) Vgl. ebda., S. 223-226.
- 100) Vgl. Goitein, a.a.O., S. 101-102.
- 101) “Jugment Dernier du Vieux Monde Social,” 1851. Vgl. Goitein, a.a.O., S. 102-103.
- 102) Vgl. ebda., S. 94-99.
- 103) Vgl. ebda., S. 105.
- 104) Vgl. ebda., S. 105.

(社会学研究科 高島ゼミナール)